

一 少将出家

本よりかかる御心ありけれど、父おとどおはしけるほどは制しきこえ給ひければ、えおぼしたたざりけれど、失せ
給ひてのち、腹々の君たちはみな心とおはしますせば、おとどおはしますなども、ことに物しき事もなし、この斎宮

の御腹の女君は、まだともかくもなくしておとどのかしづき給ひしにかかりておはせしに、さもあらねば、ただこの御
兄人たちを、むつまじきものにかたらひきこえ給ひて、世の中のおはれなることをおぼししを、見たてまつり給ふ
を、かた時見たてまつらではえおはしますまじけれど、もとよりかかる御心ありけるうちに、御めのとおはしけれ

5

ど、それも里住みにてことなる事もなくて、よろづのこと心ほそくおぼえ給ふままに、ただこの事のみ御心にいそ
がれ給ひつつ、出で給ふたびごとには、女君に「法師になりて山へまかるぞ」ときこえ給ひければ、「例のこと」と、
たはぶれにおぼしてなむ、きこえ給ひける。「まことにこのたびは」ときこえ給ひければ、「例のよきりはかへり給へ

らむをこそは法師かへるとは見め」ときこえて笑ひ給ひければ、「まことぞや」ときこえて出で給ひければ女君「法師にならむと侍るは我をいとひ給ふなめり」とて、

あはれとも思はぬ山に君し入らば麓の草の露と消ぬべし

ときこえ給へば高光の少将の君

わが入らむ山の端になほかかりたれ思ひないれそつゆも忘れじ

と申し給ひて、愛宮の御許にまで給ひて、立ちながら出で給へば、「ものきこえむ」とのたまひければ、「などえのぼり給はぬ」ときこえ給ひけれど、涙もいで給ひければ、「いそぎ物へまかる」ときこえ給ひて、ことなる事もきこえ

15

給はで出で給ひて、比叡にのぼり給ひて、御弟のおはしける室におはし、とう禪師君を召して「かしら剃れ」とのたまひければ、いとあさましくて、禪師の君、「などかくはのたまふ。御心がはりやし給へる」とて、のたまふままに泣き給ふ。

「剃れ」とのたまふ。阿闍梨も泣きてうけ給はらざりければ、御もとどりを手づから剃刀して切り給ひにければ、いかがはせむとて、なほ剃り給ひける。禪師の君、泣きまどひ給ひけり。阿闍梨も「いとあさましきわざかな。御はらからの君たちも、おのれをこそ、の給はめ」と、「御消息をだにもきこえあへずなりぬる」と泣く。禪師の君「うかうなむ、いとはかにあさましく」と、京の殿ばらにきこえ給ひければ、いみじうあさましがり、ののしりければ、内にてきこしめし驚きてけり。御妹の君なども泣きまどひ給ひけり。女房も泣きまどひて、物もおぼえ給はずあさましきに、いささかなる物もまゐらで泣き給ひける。宰相中将君をはじめたてまつりて、驚きとぶらひきこえ給ふ。山にみな登り給ふとて夜なかにぞおはしける。中宮より初めたてまつりて驚きとぶらひきこえ給ふなかに、御乳母と愛宮となむ、物もきこしめさず泣きまどひ給ひける。

二 女君と愛宮の贈答

かくいひて、いふかひなくて月ごろになりぬ。女君は、尼になりなむと泣き給ひけり。愛宮の御許になむ常に悲しきことをも通はし給ひける。

「尼にも、ここにもとなむ思ひ給ふる。ひとたびになり給へ」と愛宮の、女君の御許にきこえ給ひければ、

「尼には、誰もなるとも、同じ山には入らざらむこそかひなけれど、横川の麓までだにと思ひ給ふるに、それもかたくや」かくきこゆるに、

「いづくにもかくあさましきうき世かはあなおぼつかかな誰に問はまし」

と愛宮にきこえ給ひければ女君、

「尼にと思ひたまふれども、げに誰も同じやうにしり給はざらむをなむ。同じうきよかはと思ひ給ふべき。うから

ねばこそ登^{のぼ}りおはすらめど、山にてもといふこともあらばとなむきこえまほしきを、このかみもこの世^よをそむきて、あはれなる人の住^すみ給ふらむ横川^{よかは}をわたりて御影^{かげ}をだに見るまじくとも、猶^{なほ}、そむきても行^{をこな}ひ侍らまほしきを、宮にも、しかぞ又おぼしめすなる。御ともにもと、

〔原本コノ次二面（約三百字ニ当ル）白紙トナツテイル。早く脱落シテ了ツタモノデアロウ〕

かき、妹^{いもうと}をみずはといふこともなきにこそは。まことや、誰^{たれ}に問^とはましとか、住^すみ給ふ人^{ひと}にこそ問^とひきこえめ。うからねばこそ、

ながれてもきみすむべしと水のうへにうきよかはとも誰^{たれ}か問^とふべき」

となむきこえ給ひける。つねにこの二所^{ふたところ}、かなしうあはれなることをなむ聞^きえかはし給ひける。

三 桃園の権中納言殿の中將

かくて、かの桃園ももぞうの権中納言殿きんちゅうなごんの中將なかつうの君きみまゐり給たまひたりけりと聞きゆる人ありければ、うちおき給たまひて見みまゐらせ給たまひて、のたまふ。

「あはれなるなにはおふやとみつれどもかたちはことにあればかひなし

かたちもことになり給たまへりと聞きけど、そのすぢにはあらねば、あはれにもあらず」と聞きえ給たまひけるを、その北きたの方かた45
みたまひて、

あふことのかたちはことになれりとも心だに似にばあはれなりなむ

と聞きえ給たまひければ、その御返へかへし、

もとむともかひやなからむたぐひなくあはれにありし君きみが心に

とのたまひつつ、をりふしごとに泣き給ふを、うけ給はる人ごとにあはれがる。

四 姉北の方

三月ばかり驚なきければ、北の方

わが身にも世をうぐひすと泣きをれど君がみやまにえこそ通はね

姉北の方の御返、

山路しる鳥にわが身をなしてしが君かく恋ふとなきて告ぐべく

五 愛宮の御許より

かくて愛宮の御許よりきこえ給ひける、

「なぞもかく生ける世をへて物を思ふするがの富士のけふりたえせぬ

あはれ、あはれ、そこにもいかにとなむ思ひきこゆる。夢にも山の君の見え給ふをりは、さめてくやしくなむ」とき

こえたてまつらるれば、御返、

物思ひはわれもさこそはするがなる田子の浦波たちやまずして

となむ。

六 ほととぎす

誰も誰も御はらからの君たち、この愛宮の泣き悲しび給ふを聞き給ひて、あはれがりきこえ給ふも、物を聞えでお
はしふる。ときどき故式部卿の北の方は、時々とぶらひきこえ給ひける。四月ばかりに卯の花につけて、

君のみか我もさこそは世の中をあなうの花となくほととぎす

かへし、

うの花のさける垣根にほととぎす我はまさりてなくと知らなむ

又式部卿の北の方、ももぞのどのに聞え給ふ。「猶思ふ思ふともあさまし。やまにてもいかにつきせずおぼす

らむ。ゆめもあらば、

あはれなることかたらひてほととぎすもうごゑにこそなかまほしけれ」と。

御かへり、「かしこまりてなむ。いとまいともうれしく、かく常に問はせ給ふことなむ、つきせぬことには。いでや

いでや、すべてすべて、たどおしはからせ。まことや、

かたらはぬさきよりなきつほととぎすもののあはれを知れりと思へば」

七 三の宮より愛宮へ

かくて按察の大納言殿の北の方、愛宮の御許に、「このごろはいかが。あやしう物さわがしく思うたまへられてなむ、しばしも聞えぬ。あはれ世の中をいかながめ給ふらむ。こなたにもなか渡り給はぬ。山よりはとぶらひきこえ給ふや。さもこそは世はそむき給はめ、しのびてもいでも、おほむもとは、かたらひきこえ給へかし。女の通ふ所ならば、さて通はまほしくなむ思へど、今こそあはれな。いかにそこにも、世の中、心かなはぬをりは、山へ入りぬべきをりあれど、えやは世の中をそむく。まがまがしく、屁にならむとのたまふなる、まことか。ゆめゆめ、しかなおぼしそ。

うらみこしそむかまほしき世なりともみるめかづかぬあまになるなよ」

愛宮の御返し、「いとうれしう問はせ給へるなむ。つれづれなるに、これよりこそ聞えまほしけれど、常にさわがし

うおはしますらむにとぶらはせ給ふを喜びてぞ、そなたにも参らまほしきを、明け暮れのながめに袖のひちつつ、物おほえぬになむ。山よりときどき音づれ給ひ、かしら刺り給へらむ姿の見・たまへまほしきに、見え給はぬがうき世の中にかへらじとにやあらむと。尼には、さもやと思うたまふれども、さても猶世の中にこそ思ひかへりこめと思つたまふれば、まだ思ひたらずなむ。

あまならでそれにもしほはたるれどもうきめかづくとまたはなるべき」

八 断 章

よにはしりて山路にまどふ心も

弟の禪師の君、

出でてこし人の家路も思ほえずわがみやまこそ住みよかりけれ

九 右衛門佐愛宮を訪ふ

かくて愛宮の御許に右衛門佐おはして、少将の君おはしつるやう語りきこえ給へば、「わればかりうき身はなし。
男はおはし通ひたぶ」と、

山の井の麓にいでてなかなむ恋しき人の影をだに見む

とのたまへば、佐の君の御返、

君がすむ山川水のあさましくうき世の中になれいでにし

二〇 あけの衣

さてかの桃園の姫君、少将の君の御袖に涙のかかり、ぬれたりければ、

ほのぼのとあけの衣をけさ見れば草葉の袖は露のかかれる

佩き給ひし御佩刀の、枕上なるを見給ひても泣き給ふ。さぶらふ人々、上下、「かの御身より涙の流れ出でぬ
る」ときこえ給ひければ、姫君

津の国の堀江に深く物思へば身より涙もいづるなるらむ

人々北の方に聞え給ひければ、あはれがり給ひて、

ともすれば涙をながす君はなほ身をすみがまかこもたえせぬ

二 鏡の影

又少将の常に見給ひし御鏡を姫君見たまひて、「法師は鏡は見ぬか」とて、かはしきのしたに入れ給ふ。

常に見し鏡の山はいかがあるとかたちかはれる影も見よかし

山^{やま}にもて参^{まゐ}りたる御文^{ごふみ}に、いとあはれ多^{おほ}かる、御返^{かへ}りに、

鏡山^{かみやま}きみが影^{かげ}もやそひたると見^みればかたちはことにぞありける

三 うしほやくあま

誰々^{たれく}も、かの姫君^{ひめぎみ}の御なげきを、あはれがり給^{たま}ひけり。ももものの、ことに聞^きゆるに、男君^{をとこぎみ}、常^{つね}におはして、あはれがり給^{たま}ふ。御文^{ごふみ}にてもありけり。

姫君^{ひめぎみ}、「なほ世^よの中心^{なかつ}うし、尼^{あま}になりなむ」との給^きふを聞^ききて、少将^{きやうしやう}の君、

尼^{あま}にても同じ山^{おなやま}にはえしもあらじなほ世^よの中^{なかつ}をうらみてぞへん

かへし、

そでのうらに身^みをうしほやくあまなればみるめかづかであらむものは

二三 御精進

さてこの姫君「山の君の行ひ給ふらむ、われ魚食はむこそゆゆしけれ」とて、御精進をぞなほし給ひける。山の君
きこしめして、あはれとおぼして、ここかしこよりをかしき精進物まゐらせたるは、時々たてまつりおくるにかひに
おきたるめをはじめていれたり。又四月つごもりばかりに、鶯の巢三つばかり、むめすちばかりいれたり。

「頼みなくはかなく見ゆる我ゆゑに君がながめを思ひやるかな

あはれあはれ、ときこゆ。かひなくおぼすな。まことや精進し給ふなるは。しほうらこえぬ山なれど、こころざしあ
りておひいでたるめぞや」とあり。鶯のあふすちには、「かくぞせん」とあり。

「わがすみか君はゆかしくおもほえばあなうぐひすの巢のうちを見よ」

かへし、

「恋ひて寝し君なき床のいはなみにここのながめに袖のぬれぬる

しのびきこゆるかひもありけるかな

鶯の巢のうち見てもねをぞなく君がすみかはこれかと思へば」

一四 苔の衣

さて中納言殿の北の方、この君の御装束、袈裟より初めて一くだりせさせ給ひて、これ山へたてまつりければ、山へたてまつり給ふ。

「この御衣どもの、いとあはれなれば、忘れては誰がことぞとおぼめかれつる、

君が着しきぬにしあらねば墨染のおばつかなさに泣きてたちつる

なほなほ

奥山おくやまの苔こけの衣ころもにくらべ見みよいつれか露つゆのおきはまざると」

となむ聞きこえ給たまひける。上うへの御衣ぎせよりはじめて墨染すみぞめなり。ただ袷いあはせの御袴はかまぞかいねりなりける。山やまの御みかへり、

「山伏やまふしは苔こけの衣ころもなどのみこそ身みには添そひ（原本ココニテ十八丁ウ終、次ノ一六段ノ末近クマデ脱落。前田綱紀手沢本ニテ補フ）たれ。これは身みにも合あはぬものどもなれど、

御心ごこころざしあるものどもにてなむ賜たまはりぬる。昔むかしの着物きものにもあらねばやおぼめい給たまひつらむ。今いまよりならひ給たまへかし。

わいても、こと人のころもがへやしたまふらむ。あたらしくそでぬれぬ。ぬぎ給たまはばもの色いろわすれ給たまひなむ。まこ

とや、墨染すみぞめのきぬはきたまふなればにやいとどぬれまさりてなん。

佗もびぬればくものよそよそ墨染すみぞめの衣ころものすそぞ露つゆけかりける

露霜つゆしもはあした夕べゆふべにおく山の苔こけの衣ころもは風かぜもとまらず」

となんありける。

一五 さらに京に出でじ

さらに京に出でじとぞの給ひける。これをこの姫君・愛宮、おぼつかながり給ふ。兄弟、おこなひなん、よくよくし給ひける。母君・父大殿をなむ、いといと、よく恋ひたてまつり給ひける。

愛宮の御許に、桃園の大姫君のたてまつり給ひける。

「物思ひのやむよもなくてほどふれば（下句欠）」

一六 しのぶの草

「（上句欠）忘るることもしるのわかきか

太刀はきたるを見れば、絵にかきたるさへなむ悲しう侍りける。今日の御かたちは知らず、昔のみ面影には見え給ふ。

そこにはいか^ががとなん聞え侍る。つれづれの御すまひなればにこそ、思^{おも}ひすてられける忍草^{しのがへま}うとからずや御らんずらむ。ここにも、

独^{ひとり}のみながむる宿のつまごとに忍ぶの草ぞおひまさりける」

「うけ給はりぬ。これよりも聞えむと思^{おも}う給ふれど、袖ぬらすながめに明^あかし暮^くらすほどに怠^{おこ}り侍りにける。つ

きせぬ物思^{おも}ひは、いつはてなん。親^{おや}たちにおくれ^をたてまつりたるに、ましてかかる物思^{ものおも}ひの添^そひて侍れば、おぼしや

れ。よもぎのしげき宿^{やど}に立^{たち}寄り給ひて、あはれとの給ひし御姿^{すがた}の見えねば、月日のふる（コマデ原本脱落）ままに

は、いとあはれに侍る。かたちことになり給へらむ御姿^{すがた}を、時々見^みえ給はば、なぐさむらむをいでじとのたまふな

るこそ、いといとおぼつかなけれ。忍草^{しのがへま}はここにもや、

しげりますしのぶの上^{うへ}におきそふる我^わが身^みひとつは露^{つゆ}のほどにぞ

思^{おも}ひ消^きえなで、生きて」となむありける。

一七 早うより心かけたりし人

さてこの姫君に、早うより心かけきこえたりし人も、とぶらひけり。それが聞え給ふ。「などかこの君を山に入り給ふべく見給ひぬべきことはあらせたてまつり給ひし。まろこそ、昔、山住みはせんと思ひしか。人に物思はせ給へりし報いにおぼしめせよ。まめやかには、山に住み給ふよりも、とまりて独寝し給ふころ、いかにねぶたからずおぼすらむと思ひたてまつりて、

こそ高くあはれといはば山彦のあひ答へずはあらじと思ふ。」

よしづいてとて、かへりごとし給はず。悲しさぞまさりける。

又ほどへて、

「やまとなる耳無山の山彦は呼べどもならにあひも答へず」

こたみも、とりいるる人を見まほしとてない給ふ。

一八 京の殿より

京の殿より御文に、「このごろはいかにおぼすらむ。ここには心細きを、いとあはれになむ。ここには、このつき

160

涙とどめずそこにおぼすらむを思ひたてまつりて。屁にならむとさへのたまふなる、つねは世の中にさぞおぼすらむ。ここにぞうき世をばそむきはてなむと、いさや世の中に、ないしかみのぬしといふなれば、かしらおろしては、かうぶりとられなんと人のものすればなむ、いささかうしろのこして侍る。精進をさへし給ふなれば、若き人だに深く物をおぼすなれば、ここにはまして水風のいもひをせましとなむ。屁にてもうき世をば離れずや。なほしかなおぼしそ。

165

舟ながすほどひさしといふなるをあまとなりてもながめかるてふ」

と聞え給ひけり。御かへし、

「かしこまりてうけ給はりぬ。いとうれしう、常に問はせ給へるをなん。みづから申さまほしう思う給ふれど、このごろ、みだり心ち、例よりもまさりて、あやしう侍りてなむながめ侍る。

あまとても身をしかくさぬ物なればわれからともうきめかるなり

とうけたまはれば、思ひも定めず」と聞え給へり。

一元 太刀はきたる姿

又右衛門佐、中納言殿につたへ給へりけり。ついでに大姫君の御方につたへ給へりけり。

忘れてもうれしかりける君かとてたそかれどきはまどはれぞする

昼寝して起き給へりけるほどなりけり。右衛門佐「立ちながら聞え侍る。あやしけれども、いそぎて内へ参り侍れ

ばなん。いかにとて、えしばしばも聞え侍らず」とて、「いかに世の中を、太刀はきたるさまをも見給ふとてなむ」

と聞え給へる御返、「いと嬉しう立寄り給へるを、いそぎ給へばなん。姿は、たそかれ

どきにおぼつかなくなむ。ここには、それにもあはれになん。つれづれのながめに、すまひさ

へかはりたれば、あの人の影も見えねば、心細きを、問はせ給へるなん」と聞え給へば、「さらば静かに参らむ。太

刀はきたる姿も見給はむとあらば、ゑりくぐつにてもさぶらはむ」とて出で給ひぬ。

二 宮のこのかみ

宮のこのかみの、殿にて人たまへるついでに、ようさりつかた、月のほのかなるに、立寄り給へり。

「昔きくやどのありしえに、いかにぞや、山人はしのびてをり給ふや。あいなく、

あしひきの山よりいでん山彦はそま山水におとさざらん」

と聞え給へれば、「いと嬉しく立寄りて問はせ給へるを、はじめは嬉しかりつれども、のちの御言葉にさしあやまちで、いとどしくさまも見えで」とて、歌の返しは聞え給はず。さかさうのやうに人もこそ聞け。をとこのきむだちは、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。

三 長歌贈答

さてこの姫君、身をや投げてましとおぼせど、きむだちのおはしければ、われなくてはいかかせむとおぼして、山に聞え給ふ。「世（原本コレ以下二行ホド切断）……おのれだになくはいかがせんと思ふに、すこし露のいのちをもとめゐる。

君やうゑし われやおほしし、なでしこの ふたばみつばに おひたるを かぜにあてじと おもひつ、はな
のさかりに なるまでに いかでおほさむと おもへども つゆのいのちやあへざらむ いまぞけぬべき ここ、

ちのみ つねにみだるゝ たまのをも 絶えぬばかりぞ おもほゆる もののかすにも あらぬ身を ただひと
ゑとて あさましく あまたのことを 思ひいでて、 きみをのみ世に しのぶぐさ やどにしげくぞ おいの世
に こひてふことも 知らぬ身も しのぶることの うちはへて きてねし人も なきとこの まくらがみを
ぞ おもほしき ことかたらはん ほととぎす 来ても鳴かなん 世をうしと きみが入りにし やまがはの
水のながれて おとにだに 聞かまほしきを ほだされて 世にすみのえの みつのはに むすべることの
なかりせば つねにおもひを たきものの ひとりひとりも もえいでなまし」

山の御返し、

「もうともに 撫でておほしし、 なでしこの 露にもあてじと おもひしを あなおぼつかな 目に見えぬ は
なのかぜにや あたるらむ と思へばいとぞ あはれなる いまも見てしが と思ひつつ、 ぬる夜のゆめに 見
ゆやとて うちまどろめど 見えぬかな 目のうつつまに かぎりなく こひしきをりは おもかげに 見えて
200

も心なぐさみぬ かたみにさこそ みやこをば おもひわするゝ 時^{とき}やはある はるけきやまに 住^すまへ
ども つかまわすれず おもひやる くもるながらも あしがきの まちかかりしに おとらずぞ あはれあはれ
と まこもかる よと^よどもにこそ しのぶぐさ わがみやまにも ふもとまで 生^なふと知らなむ しらかは
の ふちも知らずは ひたぶるに きみがたにのみ うきよかは うれしきせをぞ ながれては見む」
となむありける。

三 御はらからの君たち

五月ついたちに、御はらからの君^{きみ}たち、わりご具^ぐしておはしたりけるに、雨^{あめ}の降りたりければ、いしをぎみ、
か^かかりてふよかはともへどさみだれていとど涙^{なみだ}に水^{みづ}まさりぬる

少納言、

君がすむよかはの水やまさるらむ涙の雨のやむよなければ

右衛門佐
もんのすけ

草深き山路をわけてとふ人をあはれと思へどあとふりにけり

宮権亮、

いづくへもあめのうちよりはなれなばよかはに住めばそでぞぬれます

となむ。

三 富小路の君たち

富小路の君たち、わりごしつつ、まで給へり。六郎ぎみの聞え給ふ。

「世の中、心うければ、おのれこそ、かしらそらむ、山へ入らむと思つたまへしかど、おとどの君のかくしたまは

で失せ給ひにしかば、罪深くなると思ふ給へて、思はぬ山々にありくこと、今に思ひ侍れど、君の思はずにておはすれば、御弟子にもやなりなましと思ふ給ふる」とのたまへば、禪師の君、「弟子まさりにこそあなれ」と聞え給へば、六郎きみ、「弟子まさりとおぼさばこれより深からむ山にこそ入り侍らめ、いつくならむ」とて六郎きみ、都へもさらにかへらじわがごとく罪深き山いづこなるらん

禪師の君、御かへし、

これよりも深き山辺に君いらばあさましからむ山川の水

四郎きみ、

君をなほうらやましと思ふらむ思はぬ山に心いるめり

七郎きみ、禪師の君に聞え給ふ。

君がすむ山路に露やしげるらむわけくる人の袖のぬれぬる

御かへし、

こけのきぬ身さへぞわれはそぼちぬる君は袖こそ露にぬるなれ

弟、禪師の君、

昔より山水にこそ袖ひつれ君がぬるらむ露はものかは

二四 父大殿の夢

かくてこの入道の君、御夢に、おとどの君出家し給へりし御姿にて、この横川におはしまして泣きて聞え給ひける。「なにをうしとて、かくはなり給ひしにか。尊とさはいと尊とけれども悲しくなむ。あはれに、とひきこえ給へば、それに助かることどもあり。さはあれどいとくちをしくなむある」などのたまへば、泣く泣く聞え給ふ。

「いとあはれなるすまひし給ひけるを、あまがけりてもたづねとぶらはむ。かかりとならばよにおち給ふな」とて、

君がすむ横川の水しにござはわがなきたまは常に見せてむ

御かへりごと、

いとどしく袖ぞひちぬる横川には君が影みば水もにござじ

と聞え給ふほどに、やがてさめ給ひぬ。こひちかひ給ひて、御弟の君に語らひきこえ給ひてぞ泣き給ふ。

二五 父 君 か

さてかの入道の君の御子は、太刀はき給へる人を見給ひては「ててきか」とのたまふに、

「あらず」とのたまへば、「母君こそ、ててきにはあらず。などか、ててきの久しく見えざらむ」とて泣き給へば、
君よと泣き給ふ。御ぐしかきなで、「君は山にぞおはする」とて泣き給ふを、おほちぎみ見給ひてのたまふ。
あしひきの山なる親を恋ひてなくつるの子みればわれぞ悲しき

北^{きた}の方、

ひえにすむ親^{おや}こひてなく子鶴^{こづる}ゆゑわが涙^{なみだ}こそかはと流^{なが}るれ

ははぎみ、

沢水^{さしみづ}に立つ影^{かげ}だにも見えよかしこころ子鶴^{こづる}のなきて恋^こふるに

とて泣^なき給^{たま}ふ。

かくてあはれなることがちになむありける。太刀^{たち}はきたる人みても、「これやててき、などははきのもとにおはせぬ。われをいだし給^{たま}はぬ」とてなげき給へば、ははぎみ、

あふことのかたみも知らず浦^{うら}になく舞鶴^{ひなづる}みるぞ悲^{かな}しかりける

北^{きた}の方、

あふことのかたみとてだになぐさまでわらはなきにぞわれも泣^なかるる、

おほちぎみ、

かたにても親おやににたらば恋こひなきになくを見るにぞわれも悲かなしき

三 新 少 将

兵衛佐のすけの君、入道にせうの少将きみぎみの御ごかはりに、少将しやうしやうになり給ひて、よろこびに、この中納言なかつなご殿どのに参り給へるを見給ひ。
ても、又せきやりがたき御ごけしきなり。「中なかの君きみ少将しやうしやうは、山やまの君きみのかはりか」とて、

たがはずや同おなじみかさの山の井の水にも袖そでをぬらしつるかな

北きたの方、

たがふことすくなき見るはあはれなるみかさの君きみがかはりと思へば

このいかを少将しやうしやうも、思おもひいで給ひて、涙なみだのこさでぞおはしましける。「つかさもことうづめに嬉うれしからず」とぞのたまひ

ける。「兄君あにさまのなりいで給たまはむしりにたちてありかむとこそ思おもひしか。よろこびにありかむことの悲かなしきこと」とのたまひけれど、いかがはせむとぞありき給たまひける。

かくて近衛つかさの人きて、歌うたひののしれど、なにのうれし・げもなくぞ、しほたれ給たまひける。

名なにたてるみかさの山やまに入り来きても涙なみだの雨あめになはぬるゝかな

かへし、うけたまはる人ひとの聞きこえける、

みかさ山やまあめはもらじをいにしへの君きみがかざしの露つゆにぬるゝぞ

二七 白銀の花瓶

桃園ももこのゝの中納言なかつなごんの君きみ、白銀しろかねの花瓶はながめを四よつばかり作りて、その頃ころの花はなさして山やまにたてまつり給たまふとて、

山の端はかくしもあらじ君がため都の花は折れば袖ひつ

御かへり、

わがために君が折りける花みればすむ山の端の露に袖ぬる

さてこの花など、君たちみな聞え給ひて、みな登りて見給ふ。念仏堂には、この瓶に花たててなむ行ひ給ひける。

殿上の君、しかじかと、入道の君に語り給ふ。ある殿上人、

うらに住むものといふとも君ともにかめさへのぼるみやまなりけり

同く、殿上人、

横川てふ名にはたてれど今よりは亀山とこそいふべかりけれ

又、

あはれなる君によはひをゆづりてぞ横川に亀もたちのぼりける

返し、禪師の君、

ひさしくもなにかわが身を思ふべき亀の命は君にまかせん

三 近江の北の方

又按察殿より、桃園の北の方の御許に、近江の北の方の御文、「いかに世の中をおぼしおはしますらん。幼き君たちを見たてまつり給ふに悲しくおぼすらむ。されど山にだにおはしませば、たのもしくおぼしめすらむ。ここにこそ、人かずに侍らねど、ちちなしごをもてわづらひぬれ。それは世の中をなにとは思はむ。まづかの山の御すまひのあはれなるをなむ。里へ出で給ふまじとあるはまことか。されど御命だにおはせば、

あしひきの山に年へむとおもへども都・こひしくならばいでなむ

たとふべきことにはあらねど、死出の山いりにしおきなどもの、年をふれど逢ふことなく侍れば、いみじく」とあ

り。

北の方、姫君に、かくなむと聞え給へれば、姫君の、御かへり聞え給ふ。

「都をばいとひて山に入りぬれど恋しからねば思ひいでじを

道に忘れ草こそ生ひたらめ」となむ。

二元 綿物奉入

この禪師の君の御はらからの君たち、山は夏も寒かなるを、綿物奉入し・給ふ。中宮より、くるみの色の御直垂、

くちなし染のうちき一重ね、ふるきの皮のおほんぞ、青鈍の指貫、裕の袴、たてまつれ給へる歌、

「夏なれど山は寒しといふなればこのかはぎぬぞ風はふせがむ とてなむたてまつる」とあり。

御かへし、

山風もふせぎとめつるかはぎぬのうれしきたびに袖ぞぬれぬる

大納言殿の北の方のたてまつれ給ふ。いともきよげなる袖を青色に染めて、山吹色のうちき一重ね、青鈍の綾の指

貫、袷の袴ひとかさね、たてまつれ給ふ。そへられたる歌、

君がためたちぬひたれば露ぞそふ都の野辺の苔のきぬには

かへし、

そはりける露もたえせぬ苔のきぬいとど涙にぬれまさるかな

式部卿の北の方、ひとりおはすれば、ことなることおはせねど、人のものし給ふに思ひしりてもあらねど、ふすま

たてまつり給ふ。

露のごとよひあかつきにおくなればよるの寒さにふすまかさねむ

御かへし、

よるとてもうちふすまなき山伏^{やまぶし}はころもさだめず^い今よりぞしく

三〇 ころもがは

かくてこの中宮におはしますをみな人御ぞたてまつれ給^ふが、かならずわれとたてまつらむとのたまひければ、
きさい宮われとぐしてたてまつらむとて、青鈍^{あをび}のうちきひとかさね、同じ色^{おないろ}の袴^{はかま}ひとかさねなむたてまつれ給^{たま}ひけ
る。

きみが影^{かげ}みえもやするところも川^{かは}なみたちぬひに袖^{そで}ぞぬれぬる

返し、

わがためになみのぬひけるころも川^{かは}きてだになれむ年^{とし}をわたりて

三 湯かたびら

愛宮、われなにわざをせんとて、きぬの御かたびらひとかさね、ぬのの清らなると、御湯殿しるかるらむにとて、
きみがためなくぬへば世の中になみだもかかるところもたちけり

御返、「いであはれや、これよりこそ山菅のやうなりとも御衣はたてまつれまほしけれ、ゆかたびら、ただのと、いかにせさせ給へらむと、あはれあはれと見たまふるに、

たもとよりぬれけむそもまだひぬにみにもしみぬるからごろもかな」

三 いみじくあはれになむ

わが北の方には、「あふことのかたみにとこそ見たてまつれ」となむきこえ給へりける。いみじうあはれとなむこ

とよりも愛宮あいみやのたてまつれ給たまへるをとりわきて泣なき給ひける。すべてすべくて言いひつくすべくもなく、いみじくあはれ
になむ。

〔原本コノ次、裏表紙トノ間ニ一紙ヲ挿入シテ左ノ極メヲ書ス〕

此一冊者

たむの岑の少将
高光出家事

京極黃門定家卿真蹟無

疑貽而此草子世希有之

物也深可秘箱底如今依

若狹少将源忠勝朝臣所

望誌之

特進源通村 朱判